事後評価報告書

1.　基本情報

（１）実行団体名　株式会社ＦＥＥＬ
（２）実行団体事業名　障害児等の体験格差解消事業
（３）資金分配団体名　公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団
（４）資金分配団体事業名　障害児等の体験格差解消事業
（５）事業の種類　草の根活動支援事業
（６）実施期間　2020 年 6 月～ 2023 年 3 月
（７）事業対象地域　山口県西部（下関市・長門市・山口市・宇部市）

2.　事業概要

①事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループ
障害児や児童養護施設等の子供、障害児等の家族、支援団体等
②事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）
地域児童福祉事業所や児童福祉施設に通う子どもたち、児童養護施設や児童家庭支援センターの子どもたち、不登校や総合支援学校の児童や生徒たちが、定期的に水辺での自然体験活動をする環境づくりを行い、対象者にとって身近な自然環境の中で、学び成長できるシステムを構築し、他にないモデル地域として県内外に発信しながら、多様の理解、多様の共存を推進する地域・社会になる。
③出口戦略
事業終了後も、本事業対象者が水辺の自然体験活動や通年での体験活動をする機会をつくることで体験格差を減少させ、自然のなかで学び成長す

ることができる地域をめざす。

3.　事後評価実施概要

（１）実施概要

①どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

自然体験活動を行うことにより、直接的な個々人の変化や、環境の変化、保護者やスタッフの気づきなど

②どんな調査で測定したのか

対象者の保護者、施設職員への聞き取り調査

・対象者の変化について（施設スタッフ、保護者）

③調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

特徴的な回答や具体的な内容について、再度聞き取りをして深掘りをした。

・今後への期待や事業継続への賛否、事業通じた自身の変化（施設スタッフ、保護者）　など

（２）実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

・井上　桂（内部　株式会社ＦＥＥＬ代表取締役　報告書の作成、ヒアリングの実施及び内容の取りまとめ、会議日程調整など）

・沖村　文子（外部　下関短期大学非常勤講師　ヒアリングの実施及び内容の取りまとめ、会議参加など）

・冨田　誉子（外部　株式会社ＦＥＥＬ主任　ヒアリングの実施及び内容の取りまとめ、会議参加など）

4.　事業の実績

４-１インプット（主要なものを記載）

（１）人財（主に活動していたメンバーの人数や役割など）

主に 9 名が活動し、カヤックや SUP の指導、安全管理、スタッフの事前指導などを行った。

（２） 資機材（主要なもの）　カヌー・ＳＵＰ・メガＳＵＰ、PFD、新型コロナウイルス感染拡大防止対策用の消耗品などを購入した。

（３） 経費実績　助成金の合計（円）

① 契約当初の計画金額　6,221,000 円

② 実際に投入した金額　6,221,000 円

（４） 自己資金（円）

① 契約当初の自己資金の計画金額　1,272,300 円

② 実際に投入した自己資金の金額と種類　1,484,450 円（自社からの自己資金）

③ 資金調達で工夫した点　自社での資金調達と、一部の事業で参加者に保険料を自己負担してもらった

４-２活動とアウトプットの実績

（１） 主な活動　カヌーやＳＵＰ等を用いた海浜活動

マウンテンバイクや焚火、焼き芋等のキャンプ場での活動

（２） アウトプットの実績

① アウトプット

② 指標

③ 初期値

④ 目標値

⑤ 目標達成時期（事業計画書に記載した時期）

アウトプット（資金的支援）	指標	初期値／初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期
1．支援地域において、障害児や児童養護施設等の子供が、水辺の自然体験に参加できる状態となる。	①水辺の自然体験に参加した子供の数 ②水辺の自然体験を見学した子供の数 ③水辺の自然体験に参加・見学した子供の満足度 ④水辺の自然体験に協力したサポーターの数	①支援対象地域全体で60人 ②支援対象地域全体で100人 ③満足度調査（ベースライン調査） ④支援対象地域全体で30人	①支援対象地域全体で600人（初期値から10倍） ②支援対象地域全体で250人（初期値から5倍） ③満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ④支援対象地域全体で150人（初期値から5倍）	①2023年2月
2．支援地域において、障害児やひとり親家庭等の保護者が、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	①水辺の自然体験を見学した保護者の数 ②水辺の自然体験を見学した保護者の満足度	①支援対象地域全体で30人 ②満足度調査（ベースライン調査）	①支援対象地域全体で150人（初期値から5倍） ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	①2023年2月
3．支援地域において、障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	①水辺の自然体験を見学したスタッフの数 ②水辺の自然体験を見学したスタッフの満足度	①支援対象地域全体で100人 ②満足度調査（ベースライン調査）	①支援対象地域全体で500人（初期値から5倍） ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	①2023年2月
4．支援地域において、学校や団体等が、水辺の自然体験に連携・協力・支援する状態となる。	①連携・協力・支援する学校・団体等の数 ②水辺の自然体験推進団体以外で連携・協力・支援する学校・団体等の数 ③水辺の自然体験を見学した学校・団体等の数	①支援対象地域全体で2事業者 ②支援対象地域全体で2事業者 ③支援対象地域全体で5事業者	①支援対象地域全体で10事業者（初期値の5倍） ②支援対象地域全体で10事業者（初期値の5倍） ③支援対象地域全体で10事業者（初期値の2倍）	①2023年2月
5．支援地域において、新型コロナウイルス感染症対策を講じたことにより、障害児や児童養護施設等の子供が安全に水辺の自然体験に参加できる状態となる.	①器材・設備等の拡充及び必要な人材を確保することで三密対策等の安全対策を講じた事業が実施できている状態	①支援対象地域全体で新型コロナウイルス感染症の安全対策が不十分な状態	①支援対象地域全体で新型コロナウイルス感染症の十分な安全対策を講じて事業を実施している状態	①2021年7月
アウトプット（非資金的支援）	**指標**	**初期値／初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**
5．支援地域において、実行団体間や連携協力団体とのネットワークが深まる。	①実行団体間や連携協力団体と定期的なコミュニケーションがある団体の数 ②実行団体間の事例等を共有する会議等の数	①実行団体が確定してから把握 ②支援対象地域全体で年1回の会議開催	①実行団体が確定してから設定 ②支援対象地域全体で年2回以上の開催	①2023年2月
6．支援地域において、実行団体への様々なサポートが行われる。	①情報共有会議の開催やサポートの回数等、実行団体に行った支援の回数	①実行団体が確定してから把握	①実行団体が確定してから設定	①2023年2月

⑥ 実績値

アウトプット（資金的支援）	目標値　／　目標状態	実績値
１．支援地域において、障害児や児童養護施設等の子供が、水辺の自然体験に参加できる状態となる。	①支援対象地域全体で人 600（初期値から 5 倍） ②支援対象地域全体で 250 人（初期値から 5 倍） ③満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ④支援対象地域全体で 150 人（初期値から 5 倍）	①参画者数は概ね目標値をクリアできた。コロナ対策で 1 回の参加者数を絞ったものの、開催回数を増加した。 ②見学者は、基本的に参加ができたので、見学のみという参加者がおらず、数字的にはクリアできなかったが、見学ではなく参加ができたので良い状態と考える。 ③満足度は非常に高かった。 ④サポートするスタッフ数は延べで目標値を上回った。
２．支援地域において、障害児やひとり親家庭等の保護者が、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	"①支援対象地域全体で 150 人（初期値から 5 倍） ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）"	①見学に来た保護者は目標値を超えた。 ②満足度は非常に高かった。
３．支援地域において、障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	①支援対象地域全体で 500 人（初期値から 5 倍） ②満足度の向上（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	①見学に来たスタッフもいたが、実際は研修を受けて参加するスタッフが多く、４年目以降に向けて良好な状態となった。延べ人数も目標値を超えた。 ②満足度は非常に高く、教育的効果を感じていた。

４. 支援地域において、学校や団体等が、水辺の自然体験に連携・協力・支援する状態となる。	①支援対象地域全体で 10 事業者（初期値の 2 倍） ②支援対象地域全体で 10 事業者（初期値の 2 倍） ③支援対象地域全体で 10 事業者（初期値の 2 倍）	①実際に連携・協力・支援で関わった団体等は目標値程度となった。 ②水辺の自然体験活動以外での団体数は、残念ながら目標値に至らなかった。 ③見学に来た団体数は、残念ながら目標値に至らなかった。
５.支援地域において、新型コロナウイルス感染症対策を講じたことにより、障害児や児童養護韋施設の子供たちが安全に水辺の自然体験に参加できる状態になる。	①支援対象地域全体で新型コロナウイルス感染症の十分な安全対策を講じて事業を実施している状態	①新型コロナウイルス感染症の十分な安全対策を講じて事業を実施できた。

４-３外部との連携の実績

・児童福祉施設３団体との連携により、年間を通じた事業の実施ができた。水辺の活動前の時期には、それぞれの団体の職員が集まり、指導や安全管理の研修を実施するなど、活動日以外の日程でもコミュニケーションをとることができた。コロナ禍で一回の参加者数を限定することや、活動内容やスケジューリングなど、定期的に協議をしながら進めることができた。天候に左右される開催日には、数日前からコミュニケーションをとり代替案や場所の変更等を相談した。また、事業後に保護者へのヒアリングや、関わるスタッフへのヒアリングを定期的に行うことができた。

・弊社が管理する自然体験活動ができる各施設と連携し、参加する団体の場所（拠点）や性質、対象者の年代、当日の海洋条件等を考慮し、フレキシブルに活動拠点の選択ができ、ニーズに合った活動を提供することができた。

・母子家庭の子どもたちや総合支援学校との連携事業では、事前ミーティングを何度も行い、配慮事項や支援事項、個別対応事項等を確認し事業を実施した。

・地元のコミュニティＦＭでは定期的に情報発信を行い、広く当事業を発信する機会をもった。

・下関市内の短期大学との連携で、事業時に学生にボランティアで来てもらい、活動の支援を担ってもらった。

5. アウトカムの分析

5－1. アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

【短期アウトカムに関する記載項目】

① 短期アウトカム
② 指標
③ 初期値／初期状態
④ 目標値／目標状態
⑤ 目標達成時期
⑥ アウトカム発現状況（実績）
⑦ 事前評価時の短期アウトカム（変更した場合は元の短期アウトカムを記載してください）

短期アウトカム（資金的支援）	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期
山口県中西部地域において、資金的援助により、地域児童福祉事業所や児童福祉施設に通う子どもたち、児童養護施設や児童家庭支援センターの子どもたち、不登校や総合支援学校の児童や生徒たちが、水辺の自然体験活動を通じ、協調性やリーダーシップ、自尊心の向上が見られるようになる。	①水辺の自然体験活動に参加し、継続かつ毎年参加をする参加者数 ②体験を通じて得られた人間力向上部分の評価	①子どもの水辺の自然体験活動に参加に対する意識（ベースライン調査） ②子どもの人間力に対する意識や行動（ベースライン調査）	①子どもの継続かつ毎年参加に対する意識（エンドライン調査と初期状態との比較） ②子どもの人間力向上に対する意識や行動（エンドライン調査と初期状態との比較）	2022年11月
山口県中西部地域において、資金的援助により、対象者の保護者が積極的に水辺の自然体験活動に参加する状態になる。	①水辺の自然体験活動に参加し、継続かつ毎年参加をする参加者の保護者数 ②保護者から見た、子どもの体験を通じて得られた人間力向上部分の評価 ③保護者から見た水辺の自然体験活動への評価	①保護者の継続かつ毎年参加に対する評価（ベースライン調査） ②保護者から見た子どもの人間力向上に対する意識や行動（ベースライン調査） ③保護者の水辺の自然体験活動に対する評価（ベースライン調査）	①保護者の継続かつ毎年参加に対する意識（エンドライン調査と初期状態との比較） ②保護者から見た子どもの人間力向上に対する意識や行動（エンドライン調査と初期状態との比較） ③保護者の水辺の自然体験活動に対する評価（初期状態とエンドライン調査との比較）	2022年11月
山口県中西部地域において、資金的援助により、地域児童福祉事業所や児童福祉施設、児童養護施設や児童家庭支援センターの職員が、水辺の自然体験活動を日常的な活動とする状態となる。	①水辺の自然体験活動に参加する、子どもたちが所属する施設等の職員数 ②施設等の職員から見た、子どもたちの人間力向上に関する意識や変化の向上率	①施設等の職員の水辺の継続かつ毎年参加に対する意識（ベースライン調査） ②施設等の職員から見た子どもたちの人間力に対する意識や行動（ベースライン調査）	①施設等の職員の水辺の継続かつ毎年参加に対する意識（エンドライン調査と初期状態との比較） ②施設等の職員から見た子どもたちの人間力に対する意識や行動（エンドライン調査と初期状態との比較）	2022年11月
山口県中西部地域において、資金的援助により、特別支援学校や分教室、諸団体等で水辺の自然体験活動に関する活動と理解が深まるとともに、新たなつながりや協働が生まれる状態となる。	①水辺の自然体験活動に取組み、連携していく学校や団体数 ②水辺の自然体験活動に、新たに連携していく学校や団体数 ③水辺の自然体験活動に関する学校や団体の、期待や意識調査	①地域全体での学校や団体数（ベースライン調査で特定する） ②地域全体での学校や団体数（ベースライン調査で特定する） ③関連する学校や団体関係者の期待や意識（ベースライン調査）	①地域全体での学校や団体数（初期状態との比較） ②地域全体での学校や団体数（初期状態との比較） ③関連する学校や団体関係者の期待や意識（エンドライン調査と初期状態との比較）	2022年11月
短期アウトカム（非資金的支援）	**指標**	**初期値/初期状態**	**目標値／目標状態**	**目標達成時期**
弊社がハブ機能となり、弊社と関係諸団体のみならず、関係諸団体同士や地域や学校との連携関係が構築される。	①弊社と関係諸団体との連携数や質 ②連携諸団体同士の連携数	①初期状態を把握 ②初期状態を把握	①関係諸団体の数増加や質の向上（初期状態との比較） ②連携団体同士の連携数（初期状態との比較）	2023年2月
弊社や弊社に関わる指導者のスキルアップや組織体制強化が図られ、体験格差解消に向けた公益活動が活性化される。	①必要なスキルとマネジメントを備えられたか ②財政状況の改善あるいは強化されたか ③プログラムの有効性と展開性	①初期状態を把握 ②初期状態を把握 ③対象者に合ったプログラムかどうかを調査	①初期状態と比較した質やレベルの向上 ②財政状況を初期状態と比較し強化 ③初期状態と比較し改善され強化	2023年2月

（２）アウトカム達成度についての評価

アウトカムの達成度としては、概ね達成できたと考えている。地域全域ではないが、関わる複数の団体においては、年間を通じた活動を行うことによって、対象者が自然体験をすることがより日常的になり、水辺の自然体験活動に限定しても、毎年恒例の複数回参加できる事業として定着化した。

5－2. 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

事業を通年で開催することにより、対象者の保護者や通所施設から本事業がとても大きな期待があることがわかった。事後のヒアリングでも、私たちには見えない部分の成長や変化、多くの気づきがあり、既に各方面に口コミ等で広がりつつある。

海での体験では、参加者たちが活動に慣れただけでなく、保護者自身が子どもを海に連れていく自信やイメージができ、活動をすることによって家族単位で水辺の活動をする行動へと繋がった。また、自転車の経験がなかった参加者は、自転車に乗れるようになった後自転車を購入し、日常的に自転車を乗るようになった。このように、私たちが行った事業内だけでなく、そこでの経験を基に事業以外で自然体験活動が推進される副次的効果が見られた。

5－3. 事業の効率性

人的資源面では、職員がオペレーションや指導、安全管理ができるため、全ての事業の実施を社内の人材で行うことができた。これにより、参加者数に合わせて指導者数をコントロールすることができ、また天候等によるプログラム内容の変更の際にも対応ができた。

資材面においても、既に所持をしているアクティビティ用の資材に合わせ、マイクロバスやトラックを所持しているため、参加者がより容易に参加しやすく、資材の運搬が必要な際もタイムリーな運搬が可能で、事業の効率性を向上させた。

また、連携団体とは事業日以外でも日常的なコミュニケーションをとることで、事業時や事業前の細かなすり合わせをしやすく、お互いに事業を遂行しやすくすることができた。

6. 成功要因・課題

・関わるスタッフのスキルアップがなされ、活動がよりやりやすくなった。各団体及びスタッフ個々人が、事業への参画者であることを意識し、安全に活動を行うため、事前研修を定期的に開催することができた。

・対象者の保護者が積極的に活動する状態になった。活動を可視化することで、親子での参加イメージが理解され、年々保護者の参加数が増加した。

・年間を通じて活動ができた 3 団体は、継続かつ毎年参加の児童や生徒がいたが、新型コロナウイルスの影響で校外活動が制限された学校や施設に

おいては、複数回の事業実施がかなわず、対象者の継続的な参加ができなかった。

7.　その他深掘り検証項目（任意）

・通年の事業を通じ、多くの保護者や関わるスタッフにヒアリングをしたが、まず、スタッフの中にも海での活動が初めてという方が少なくはなかった。こうした部分からも、仮に水辺の自然体験活動が有益だと理解していても、施設のスタッフ側にその経験やスキルがないことから、これまでその機会がなかったことが伺えた。また、初めて海に入ったという参加者も多く、体験格差が現実であることがより理解できた。陸上での活動においては、自転車に乗ったことがない（乗る練習をしたこともない）参加者が一定数存在し、事業にて自転車に乗ることができ大きな感動があった。また焚き火が初めてという参加者も多く、総じて体験の機会が少ない印象を受けた。

8.　結論

8 - 1 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス				○	
（2）事業成果の達成度				○	

8-2 事業実施の妥当性

・本事業の実施を夏期にこだわらず通年で開催できたことは、事業を実施するうえで有効性があったと考える。対象者に、水が苦手、海が怖いなど環境そのものに苦手意識があった場合そもそも事業に参加しない可能性があり、水辺以外の活動があることで参加の可能性を広げることができた。また、活動を通じて海が苦手な対象者の苦手意識を軽減させることもできた。

・通年での活動であったため、より多くの対象者かつ複数回の参加が可能となった。新型コロナウイルスの影響がなければ、一回の開催の参加者数を絞らずに実施できたため、更に多くの対象者を参加させることができた。

・事業内容については、対象者の体験格差を減少する内容になっていたことと、保護者や通所施設のニーズと合致し、更には期待以上の内容が提供でき、妥当であったと考える。

・予算に対しての効果も、可能な限り高頻度で事業を行ったため、当初予算よりも自己資金を多く投入する結果となったが、この３年間だけでなく４年目以降も継続して実施する体制が構築できたことは、当社としても投入価値があったと考えている。

9. 提言

・本事業の評価結果に基づき、対象者やその家族、彼らが通所する施設等から、大きな期待が寄せられていることがわかった。弊社の管理運営する施設や委託業務等でも多くの自然体験活動を行っているが、本事業に直結する事業が多いわけではなく、体験格差を意識した事業は今後継続して必要である。本事業以外の部分でも、総合支援学校や不登校児の通う学校との事業は多少あり、今後は既存の繋がりのある学校と連携しながら事業を拡大していきたい。自走化に向けた取組みとしては、3 年間実施してきた団体とは、同内容を継続して実施していくために既に次年度のスケジューリングを始めており、管理運営する施設での事業化、予算化を図るとともに、どこまでを受益者負担にするかなど協議していきたいと考えている。

10. 知見・教訓

・本事業の対象者の家族、対象者が利用する施設等からは、自然体験活動に対する期待が高く、かつ対象者の成長において必要な活動であることがわかった。私たちは自然体験活動を推進する公共施設を複数管理運営しており、その施設の取り組みとして、本事業を推進していくとこが今後継続していく方策だと考えている。また、連携する近隣の施設等に、本事業の対象者が自然体験をする意義を紹介し活動を広げ、類似の団体にも本事業の紹介や実績、効果を伝えながら参画を求め、活動の幅を広げていきたい。今回は発達障害児が中心となり 3 年間の活動を進めてきたが、不登校児も等しく体験格差がある対象と捉えており、今後は新たな対象としてチャレンジしていきたい。また、今回の保護者のインタビューでも多数声が上がったのが、学校や通所施設を卒業した後も今回同様の活動を継続してほしいという声であり、一過性のものでなく継続性ある活動が必要であると感じている。

11. 資料（別添）

別添：新聞掲載記事、事業の様子がわかる写真

■参考
◎短期アウトカム〜〜の評価
１）調査方法
・事業実施後等のインタビュー
２）調査実施時期
・2022 年 8 月〜2022 年 12 月
３）調査対象者
・事業の対象となった 6 団体のうち，最も特徴的な変化を示した 2 団体の参加者の保護者、団体職員を対象にした。可能な限り対象者全員から回答を得たく、インタビューを実施した。

4）分析方法

・調査から得られたエピソードを抽出し分析した。

＜保護者からのヒアリング＞

・カヌーや SUP はとてもいい経験

・SUP やメガ SUP を楽しむことができた

・カヌーや SUP を楽しむことができた。海の生き物を採集など色々な体験ができた

・最初はカヌーや SUP に乗るのが怖いと言っていたが、乗ってみると楽しかったとのことで、すっかり慣れて楽しむことができた

・SUP に乗って海に漂っているだけでも、子どもが穏やかになり効果があると感じた

・子どもがカヌーや SUP に乗れるなんて思ってもいなかったが、参加させて本当によかった

・子どもが海に慣れたので、家族で今後海に行ける

・卒業しても参加したい！

・卒業後は自閉症のサークルメンバーで参加し、引き続き楽しみたい

・親子で楽しめ貴重な経験だった

・家族では行けないと思っていたけどできた事に感動

・子どもにこのような体験が必要だと改めて感じた

・家族で毎年の恒例行事のように思っていて楽しみにしている

・子どもの姿が想像以上に成長していて驚いた

・子どもが想像以上に楽しかったようで、家に帰って話をしてくれた

・建物が綺麗で恵まれた環境で活動ができた

・プライベートの環境下での活動だったので参加をさせやすかった

・このような活動ができてありがたい

・3 年目にしてやっと子どもを参加させる勇気が出た

・子どもにとってとても貴重で成長につながる体験だった
・また来年もお願いしたい
・高校生になって子どもの行事に参加出来なくて寂しかったので、一緒に行けて良かった
・参加後の子どもの表情に変化がありとても楽しそうだった
・初めて自転車に乗れたと大喜びでとてもテンションが上がっていた
・これまで焚き火を経験させたことがなかったのでとてもよい機会だった

＜スタッフからのヒアリング＞
・今まで経験した事が無い事に対して「どうせ出来ない…」とチャレンジを拒んでいた子どもが、終了時には少し自信のついた笑顔や表情を見せていた。
・経験する事の大切さを実感しました。
・海が怖いと言っていた子が徐々に海に慣れ、入れる距離が伸びた時に成長を感じた
・海では他の事業所との子どもたちとも一緒に遊ぶことができた
・他の子どもたちとのトラブルが減った
・SUP に乗ってバランスをとっていたので、その後のバランスが良くなった
・魚やくらげに興味を持つことができた
・海を感じ、自然を感じることに成長を感じた
・他者を思いやる気持ちが育った
・カヌーや SUP の順番を守るということができた。成長を感じた
・カヌー体験は子供達皆それぞれがチャレンジをし、最初は不安そうな表情をしていた子も次第に笑顔になり積極的にチャレンジする姿を見る事ができた
・コロナ禍で制約がある中、カヌー体験を通して子どもたちが経験をする事で自信に繋がり笑顔が増え、少しずつ成長していく姿を見れる事が嬉しかった

・最初は海での活動が不安だったが、研修や回数を重ねることにより安心して活動ができるようになった
・自転車に乗れる子が乗れない子に教える姿は、普段見ることができない光景だった
・自転車に乗れなかった子が乗れた時は、言葉に表せないくらい感動した

カヌーに乗ると言う活動以外にも…
バスでの移動、慣れない場所での食事、トイレ、着替え､スタッフの方のお話を聞く､スタッフの方との関わり等、いつもと違う事を経験する事の大切さも子供達の様子から感じる事が出来ました!!

＜考察＞
1．カヌーや SUP、その他の海浜活動が、対象者にとって楽しい活動であり、チャレンジができる活動であったことがわかった
2．カヌーや SUP、その他の海浜活動が、対象者の様々な興味や関心を抱く活動であり、必要な体験機会である
3．カヌーや SUP、その他の海浜活動を通じて、対象者の保護者は事業に対して理解があり、継続して活動がしたい、もしくは自分たちで活動を行いたいと考えている
4．カヌーや SUP、その他の海浜活動を通じて、対象者は成長段階に学ばなければならないルールやマナーなどを習得、人間力の向上を得るすることができた
5．年間を通じた活動を行い、スタッフは対象者のよい変化や成長した姿を見ることができた
6．年間を通じた活動を行い、スタッフは非日常の体験活動からその重要性を感じた

〈増山さんの作品〉

障害児が海体験 マリンスポーツ

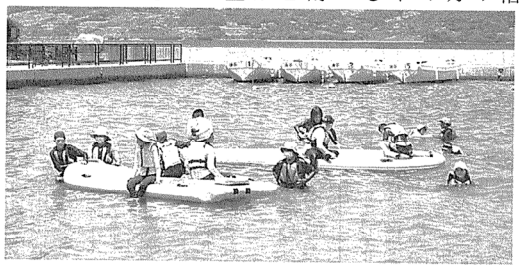
油谷青少年の家

青少年の健全育成を推進する公益財団法人「B&G財団」（本部＝東京）が主催する「障害児のマリンスポーツ体験」が7月中旬、油谷青少年自然の家（小坂保成所長）で行われ、下関市の児童福祉施設に通う障害児やその家族などのべ約200人が海水浴のほかサップやシーカヤックでマリンスポーツを満喫した。

B&G財団では、2019年から休眠預金を活用した障害児等の体験格差解消事業に着手。全国10ケ所の実行団体とともに〝マリンスポーツ体験〟などの活動に取り組んでいる。油谷青少年自然の家の指定管理者・FEEL（下関市）もその実行団体の1つ。FEELでは3年ほど前から下関市の児童福祉施設3ケ所に通う子どもたちや家族を招き、マリンスポーツ体験会を行ってきた。

今年は障害児や保護者など約30人が参加。昼食をとった後、浜辺から海に入り、休憩をはさみながら約90分にわたって海水浴やサップボード、シーカヤックなどを楽しんだ。

FEELの井上桂代表は「夏のマリンスポーツ体験のほかにマウンテンバイクや沢登り、キャンプなど、季節に応じて年間10回以上の体験会を開いている。児童福祉施設のほか総合支援学校、母子家庭の団体を対象とした活動もある。今後も様々な取り組みを行っていきたい」と話している。



〈油谷伊上の海でマリンスポーツに取り組む子どもたち〉

勤務、井上知美さん（30）＝県農協三隅支所勤務、品川萌奈美さん（19）＝同長門総括本部勤務＝の3人。3年連続でアテンダントを務める木下さんは「前年度はなかなか活動ができなかった。今年度は皆さんに安全運転を心掛けて頂けるよう啓発に努めたい」と話しており、井上さんは「交通安全に貢献できるよう頑張りたい」、品川さんは「自分自身も無事故無違反に努めながら、周りの人にも安全運転を呼びかけたい」と語った。

はい！こちら長門市消費生活センターです！

消費者トラブルに関するご相談
出前講座開催のお申し込みは

長門市消費生活センター
（長門市役所市民活動推進課内）
TEL:23－1115
E-mail:soudan@city.nagato.lg.jp

〈出前講座〉
自治会、いきいきサロン、老人会等に消費生活相談員が出向いて、消費生活について、1時間程度の講座を行っています。詳細は長門市消費生活センターにお問い合わせ下さい。

〈市内の被害状況〉
当センターには、様々な消費生活、詐欺手口に関する相談が寄せられています。

【長門市消費生活センターの相談件数】
令和4年9月の相談件数　28件
令和4年度9月までの相談件数　141件

…しかし記憶が…
ーボードに向き合いたい気持ちが勝っていた。
「……よし」
止まっていた時計を、動かそう。数日ぶりに電源を入れると、起動するまでの時間さえももったいなく感じた。何が描かれているわけでもない画面のビジュアルが、余計に想像を膨らませてくれる。
最初はただ、物珍しさから始まった取材だったかもしれない。ただふんわりとした湯けむりの正体は、次第にくっきりとした形で現れる。旅人からもう一歩、もう一歩と踏み込むにつれて、本来なら世に出てはならないところまでたどりついてしまった。
「これで一ページ」
そんなゴシップは、一瞬の享楽を生み出すだけで、僕が書きたいものとは違う。時代が変わっても、生活が変わっても、ここで生きようとする人の背景に寄り添いたいのだ。
女将は変わらないまちを守ろうとした。親父は順応できるまちをつくろうとした。孫はもっと未来を想像して、新たな価値をまちに生み出そうとした。
そうだよな、と一度手を止める。
「みんな、正しかったんだ」

ながと密着型文芸サークル「文武薗（ぶんぶえん）」（田中（たなか）輝（てる））代表のオリジナル小説を連載しています。「アイと湯けむり」は田中代表（ペンネーム海波かなた）の作品です。毎週金曜日に掲載します。

清掃パート募集
午前中3～4時間程度　時給￥850～
（土・日勤務可能な方。応相談）
グラン・ジュテ
〒759-4101　長門市東深川1862番地4
tel.(0837)22-2204　fax.(0837)22-2860

長門市駅前24時間パーキング
パーク長門
駐車料金1日（24時間）で500円・1時間100円

癒しの隠れ家　1日1組限定　平日AM&PM
アロマヘッドマッサージ
心と身体のリラックスとアンチエイジング
問合せ　ピアノ&ヨガアカデミー長門市駅　090-4512-1199（山崎葉子）

う
〈休診日〉
☎0837-2

しみず循環器科内科医院
日曜、祝日、水曜午後、土曜午後　休診
長門市東深川1385-1　TEL（0837）22-2205

1日車検OK！　レッカー作業24時間対応　JAF取扱店　日曜営業
MISUMI CAR&CO.
各種自動車販売　（株）三隅自動車商会
三隅店　長門市三隅下豊原　☎(0837)43-0155
油谷店　長門市油谷伊上1430-1　☎(0837)32-2878

半田内科クリニック
日本肝臓学会専門医・日本消化器学会認定医・産業認定医
院長：半田 哲朗　【平日】午前8:30～午後18:00（木曜日は午後休診）【土曜】午前8:30～午後12:30
長門市駅南口（駐車場前）☎(0837) 23-3030

Bodysh
板金・塗
長門自
長門市西深川

11.資料（活動写真）

CAPTAIN STAG